2008 AUTUMN
VOLUME 04
MKT PRICE
［頒布］

コノハナサクヤ

the Little Sweet Ladies Smiling Heavenly in the Field of Flowery Flowery Crimson Flames

有栖山公園 PRESENTS
属性
［ワイディー］
YANDERE COLLECTIVE ANTHOLOGY SERIES FOURTH SP "KONOHANASAKUYA"

縁起説話

「花言葉で贈るヤンデレストーリー」

本書はサークル「有栖山公園」企画の下、執筆陣を mixi のヤンデレコミュにて募集し、編纂、発行したものです。
前々回の「古典」、前回の「三題噺」に続き、今回は「花・花言葉」をテーマに設定。14 人の小説・漫画執筆陣と 1 人の表紙絵師、そして 1 人のデザイナーが「百花繚乱」の名の下に華やかなるヤンデレ・テイルズをお届けします。

それでは、しばしの間お付き合いのほどを。

——有栖山葡萄

有栖山公園 PRESENTS

属性 [ワイディー]

CONTENTS

VOLUME.04

表紙イラスト／まりりん（シクラメン／篝火草）
表紙デザイン／維如星

3rd ANNIVERSARY YANDERE

FLOWER TALES: KONOHANASAKUYA

小説・コミック

5 小説
My Sunflower Girl
モチーフ：向日葵（ひまわり）
a-park

19 コミックス
二番目の女
モチーフ：スイートピー
夜叉姫

33 小説
戀病藥師如来
モチーフ：南天（なんてん）
衛地朱丸

43 小説
梅雨空の下で
モチーフ：紫陽花（あじさい）
YOROI

57 コミックス
嘘吐きが咲き 花は嗤う
モチーフ：君影草（すずらん）
音無季常

73 小説
花と花壇とサラと僕と
モチーフ：マリーゴールド
えふあな

87 小説
学者アドルフの日々
モチーフ：杜鵑草（ほととぎす）
七曜

99 小説
手にした百合は永遠に
モチーフ：百合
mitori

111 コミックス
桜下紅恋
モチーフ：山桜
いずみやみその

121 小説
Falling Fall
モチーフ：秋桜（こすもす）
t- Я

139 小説
あの根の値
モチーフ：薄雪草（エーデルワイス）
漫遊

153 小説
侵蝕
モチーフ：椿
辛枝

171 小説
God bless flowers... and You?
モチーフ：ハナミズキ
葉月倫

193 小説
the Blue Planets
モチーフ：薔薇
有栖山葡萄

223 おまけ
執筆陣あとがき

Front Cover Flower:

篝火草（シクラメン）

Cyclamen persicum / サクラソウ科シクラメン属

花材説話

「はにかみ・遠慮がち・疑いを持つ」

多様な色を持つシクラメンは、その色によって花言葉を変えます。表紙の赤いシクラメンは「嫉妬」。はにかみや遠慮などという花弁がうつむく様から付けられた言葉とは対照的に、紅い花弁は燃え上がる炎を連想させ、篝火草という別名を持つと共に、疑いが嫉妬の炎になるとつながったようです。

古いアニメ「花の子ルンルン」ではこの「疑いを持つ」という言葉が選ばれていました。……子供向けなのに、なんてディープな言葉を選ぶスタッフなのでしょうか。

——有栖山葡萄（代理）

RED CYCLAMEN

SUNFLOWER

Next Flower:

向日葵（ひまわり）

The sunflower is an annual plant in the family Asteraceae and native to the Americas, with a large flowering head. The stem can grow as high as 3 meters, and the flower head can reach 30 cm in diameter with the "large" seeds.

My Sunflower Girl

a-park

目の前に広がるのは一面のひまわり畑と、その中を貫く平坦で単調な田舎道。開花シーズンには観光客で埋め尽くされるというこの道も、花の盛りまで数ヶ月ある今ではまだ閑散とした物だ。

どうと言うことのない日課。ただの朝の通学路。僕がこの町に引っ越してきてから一週間、そろそろ慣れつつあるそれに違和感をもたらしたのは、道ばたでしゃがみ込む小さな人影だった。

よく見れば、それは僕の学校の女生徒のようだった。困り果てた様子でうつむく彼女を見て、僕は思わず声をかけていた。

「きみ、どうしたの？」

「えっ……　あ、自転車がパンクしちゃって。動けなくて困ってたんです」

背中の中ほどまでの手入れの行き届いた黒髪。濡れたように光る大きな目と、それを強調する小さな顔。転入してきて1週間、そろそろ見慣れつつある野暮ったいセーラー服とスカートが、少女の触れれば折れそうな小さく華奢な体を包んでいる。

男なら誰でも守ってやりたくなるタイプとでも言うべきだろうか。個性のない田舎高校の制服に身を包んでいながらも、その美少女ぶりはずいぶんと僕の目を引いた。

「一応修理キットを持ってるから直せるけど……どうする？」

「すみません……お願いします」

僕の問いかけに、彼女は控えめにうなずいたのだった。

「……よっと。うん、これで修理完了だな。もう乗っても大丈夫だと思う」

「ありがとう。誰も通らなかったらどうしようかと……」

感謝する彼女をよそに周囲を見回す。修理に没頭している間は気がつかなかったが、すでに日はだいぶ昇っていた。時計を見るまでもなく、どう考えても遅刻確定の時間だ。

初対面とはいえ、ここで彼女を置き去りに自分一人だけが学校へ急ぐのも冷たい気がする。

「じゃあ、行こうか」

うなずく彼女が自転車にまたがるのを待って、僕らはひまわり畑の中の一本道を二人で走り出した。

「ええと、きみの名前は……？」

「そういえば、名前を聞いてなかったよね？」

彼女の名前を聞いていなかった事を今さら思い出し、尋ねようとすると互いの声が重なる。どうやら二人とも同じ事を考えていたようだ。

「川戸。川戸悠真（かわとゆうま）。制服を見れば判ると思うけど、東高3年」

「わたしは澪。瀬戸澪（せとみお）、3年C組。川戸くんは何組？」

「僕は理数科。だから何組とかはないかな」

「あ、そうなんだ。あんまり見たことのない顔だから、転校生なのかな、って思ってた」

いくら田舎の学校とはいえ、一学年は２００人は居る。全員

の顔を知っている方が珍しいよ、と内心で苦笑しつつ、瀬戸さんの質問に答えた。
「転校生、ってのも当たりではあるんだけどね。先週引っ越してきたばっかり」
「え、本当に転校生なんだ……。じゃあ、もしかして札幌からやってきてたりする？　それとも本州だったり？」
「本州というか、まぁ東京かな。生まれてこの方ずっと向こうで暮らしてた」
「すごい！　私東京って行ったことないんだ。修学旅行は広島だったし。ひまわりくらいしか見る物のないこんな町、向こうと比べたらつまらなくない？」
「うーん、まあ、これはこれで良いんじゃない？　僕はまだ引っ越してきたばかりだから、何とも言えないや」
「そうかなぁ……」
いきなりなんの相談もせず、会社を辞めて田舎で喫茶店を開くなどと言い出し、無理やり転居してきた僕の両親を恨んでいないと言えば嘘になる。思い出の町が北海道にあるから今度そこで店を開くつもりだ、なんて突然言われて納得できる方がどうかしていた。
しかし、初対面の女の子にそんな事を言うほど馬鹿でもないつもりだった。
そんな思いをよそに、僕の言葉を聞いたきり押し黙る彼女。
結局僕らは、残りの時間は会話を弾ませる事もなく学校へと着いたのだった。

休み時間の始まりを告げるチャイムが鳴り、荷物をまとめた教師が教室を出て行くとともに、弛緩した空気が場を支配する。
「なぁ、川戸。おまえ今日、思いっきり遅刻してたけど、何があったんだ？」
思い思いにくつろぐ周囲に混じり僕も一息ついていると、前の席のクラスメイトから朝のことについて尋ねられた。
「何がって、来る途中に自転車がパンクして困ってる娘が居て、修理してあげただけだよ。確か瀬戸さんとか言ったな、うちの3年生だって」
「瀬戸って……まさか、瀬戸澪の事じゃないよな？」
「ああ、確か下の名前はそんな感じだったはずだけど。何、急に驚いて？」
「何がって、あの瀬戸澪を知らないのかよ。しかも、通学途中に会うなんて偶然が……あ、そういえば川戸、お前って隣町、あの『ひまわりの街』に住んでたよな。それなら瀬戸澪と一緒だし、そういう事もあるか」
「さっきから『瀬戸澪』って呼び捨てで、そんなに有名人か何かなの？　あの娘は」
「有名も何も、この学校であの娘を知らない奴は転入してきたばかりの川戸くらいだと思うぜ？　何たってあの可愛さ。確か

SWEAT PEA

Next Flower:

スイートピー

Sweet Pea is a flowering plant in the genus Lathyrus in the family Fabaceae, native to the eastern Mediterranean region from Sicily east to Crete. It is an annual climbing plant, growing to a height of 1-2 m where suitable support is available.

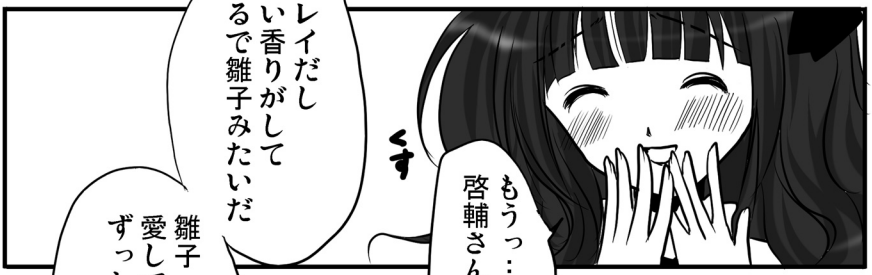
二番目の女

夜叉姫

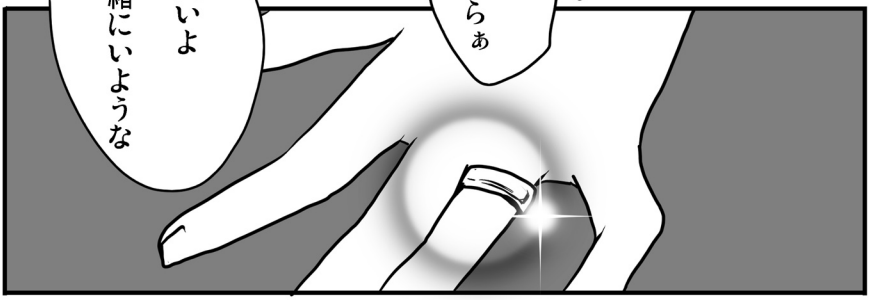
フランク♪フンフ
フンフンフンフ♪
ガチャガチャ
パターン
ただいま 雛子(ひなこ)
啓輔(けいすけ)さん おかえりなさい
「二番目の女」
Presented by. 夜叉姫
+Dolce vite+
http://dolcevite.sakura.ne.jp/

優しい貴方

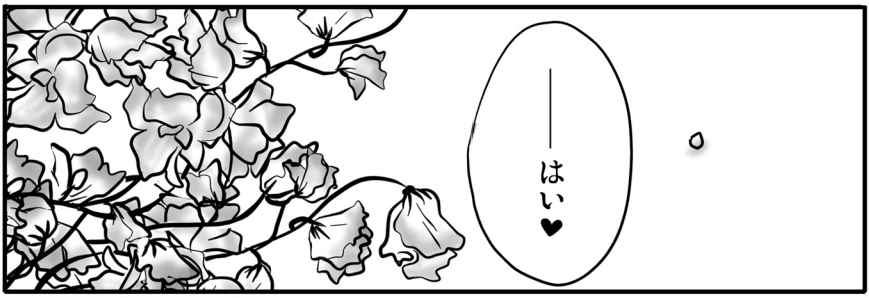
大好きな貴方



―――― だけど



貴方は既に私じゃない「誰カノモノ」



貴方が私を愛してくれるなら、「二番目」でもかまわない。

SACRED BAMBOO

Next Flower:

南天（なんてん）

Nandina domestica (Heavenly bamboo or Sacred bamboo), is a suckering shrub in the Barberry family, Berberidaceae; it is a monotypic genus, with this species as its only member. It is native to eastern Asia from the Himalaya east to Japan. Despite the common name, it is not a bamboo at all.

れんびょうやくしにょらい
戀病藥師如来

衛地朱丸

昔々、越中におときという女性がおりました。おときは薬売りを生業とし、全国を渡り歩きながら病に苦しむ人々に救いの手を差し伸べていたのでした。

「雪も激しくなって来ましたし、今年はこの村にでも留まりましょうか？」

ある年の師走、おときは雪の降りしきるみちのくの山村を訪れました。

「ふぅ。この地方を訪れるのは初めてですが、人々のお役に立てるよう頑張らなければ！」

おときは雪の積もった道端に重い薬箱を置き、一息吐きました。そしてこの村でも職務を全うしようと強く心に誓うのでした。

おときは裕福な家庭に生まれ、何不自由なく育ちました。ですが、世の中に貧しい人間が多いことを知った時、贅沢な暮らしをしている自分が申し訳ないと思うようになりました。

そして、自分の資財を少しでも満足に薬も買えない貧しい人々のお役に立たせようと思い、薬売りを始めたのでした。

（はぁ。そろそろ身を固めたいところですわね……）

薬売りを生業とし数年が経ち、おときは今の仕事が自分の天職だと誇りを持つようになりました。

一方、自分もいい年なんだし、そろそろ殿方を見つけて結婚したいと思っているのでした。

（いけません！　世の中にはまだまだ困っている方が大勢いらっしゃいますのに。自分の幸せばかりを考えては!!）

ですが、より多くの貧しい人々を助けるのが先だと、恋心を抑え続ける日々が続くのでした。

「誰か薬が欲しい方はいらっしゃいませんか～～？　困っている方がいらっしゃいましたなら、お安くお譲りいたしますよ～～」

おときは声をあげ、山村を歩き回りました。おときは商売というより慈善事業として薬売りを行っており、ちょっとした野菜等の食材や、支払うものがなければ代わりに一晩止めてもらうなどして薬を譲り渡していたのでした。

「そごの人。薬を譲ってくれねぇが？」

すると、初老の女性がおときに声をかけました。

「はい、構いませんよ」

声をかけてきた女性に対し、おときは笑顔で応えました。

「そりゃあよがっだ。ウヂの旦那様が病をこじらせで咳がとまんねぇんだ」

「まあ、それは一大事です！　早くその方の元に向かわなくては!!」

「すまねぇ、恩に着る！」

そうしておときは初老の女性に連れられ、村外れにある大層立派なお屋敷へ案内されたのでした。何でもこの家の主人はこ

の辺り一帯を治める地主様という話でした。
「ゴホッ！　ゴホッ！　グヘッ！　ウェッ！」
初老の女性に案内された部屋には、布団に横たわり咳に苦しむ男の姿がありました。
「大変！　この生薬をお飲みくださいませ!!」
おときは着物の裾を上げながら急いで男の元へ駆けつけ、赤い実を差し出すのでした。
「すっ、すまない、エホッ！　エホッ!!」
男はおときの差し出した実を口に入れ、実を砕きながら飲み込みました。
「ケホッ！　ケホッ！　ふぅ」
男はおときの差し出した実を口にしたことで、咳が収まったのでした。
「助かりました。ちょうど薬を切らしていたところで、麓まで女中に買わせに行こうとしていたところなのです。貴女が通り過ぎたお陰で、大事に至らずに済みました。本当にありがとうございます」
「いっ、いえっ！　わ、わ、私は薬師として当然のことをしたまでで」
「私は義隆と申します。貴女は？」
「わっ、私はおときと申します！」
「おときですか。いい名前ですね」
そう言い、男は優しい顔でおときの名前を褒め称えるのでした。
「いっ、いい名前だなんてそんなっ！」
男がにっこりと微笑むと、おときは顔を赤らめながらあたふたと慌てふためくのでした。
「あの、先程から落ち着きがないようなのですが、何か気に障ることでも？」
「いっ、いえっ！　そういうことではなく……」
おときは清楚な雰囲気の義隆に一目惚れし、まともに顔を合わせられないほど惚れ込んでしまったのでした。
「それにしても先程の赤い実、初めて見る実ですね。一体何という名前なのでしょうか？」
自分の咳を止めてくれた物珍しい実に義隆は興味を持ち、おときに訊ねるのでした。
「はい。この実は南天の実です」
「南天？」
「南天は東海道以西の山間部などに自生している花で、その実は咳止めとして重宝しております」
おときは薬師の面目躍如という感じに、薬の効能を丁寧に説明するのでした。
「成程。道理でこの辺りでは見かけないはずですね」
「また、葉も熱冷ましなどに効能があります」
「へぇ。花そのものが病に対して効果があるという感じですね。まるであなたみたいだ」

HORTENSIA

Next Flower:
紫陽花（あじさい）

Hydrangea is native to southern and eastern Asia and North and South America. The flowers are extremely common in the Azores Islands of Portugal, particularly on Faial Island, which is known as the "blue island" due to the vast number of hydrangeas present on the island.

梅雨空の下で

YOROI

今日も、相変わらず雨が降っている。
梅雨だから当たり前のことなので特に気にすることもなく、僕は手に持っていた傘を開いて校門までの道を歩き出した。
すでに下校の時刻を過ぎているので、周りには家路を急ぐ生徒がたくさんいる。
その様子を見ながら歩いていると、ふと傍らに咲いている紫陽花が目に入った。
この時期の花としては、あまりにもポピュラーな花だし、どこにでも植えられてるので珍しくもない。
ただ、普段なら目に入らないそれが、今日はたまたま目に入ったということだけだ。
花は、今が盛りだと言わんばかりに大きく咲き誇り、降り注ぐ雨をその身に受けて余計に際立っているようにも見えた。
「今が見ごろだよ」
「え？」
その時、突然声がした。
振り向くと、そこには女生徒が一人たたずんでいた。
短い髪とスレンダーな身体。全体的に、ボーイッシュな感じのする彼女。
確か同じクラスのはずだけど、名前が出てこない。
他人の名前を覚えるのが苦手な僕は、未だにクラス全員の顔と名前が一致しないからだ。
「紫陽花、この時期が一番、見ごたえがあるんだ」
そう言って咲いている紫陽花の元へ歩み寄る。でも、ほんの数秒だけ花を見つめた後、僕の方へ振り返った。
「じゃあね」
笑顔でそう言うと、彼女はきびすを返し、ゆっくりとした歩調で校門の方へ歩いていった。
僕はもう一度だけ紫陽花に横目で見て視線を戻し、彼女の後姿をしばらく見つめる。
名前は知らないけど、さっきの笑顔は、すごく綺麗だったから。
そして、次の日。僕は学校へ着くと、彼女の姿を探した。でも、それらしい子はいなかった。
おかしいなと思いつつ、そのまま担任教師がやってきて出席を取り始めたその時だった。
「はい」
彼女と似た感じの声を耳にして、僕はそちらへと視線を送る。
窓際の席にいる僕とはまるで正反対、廊下側の真ん中辺りに彼女がいた。
「稲森梢（いなもりすずえ）」
それが彼女の名前だった。でも、おかしい。
確かに、姿は昨日の彼女そのものだけど、今はまるで違って見える。
どことなく雰囲気が地味で表情も暗い。彼女に間違いないのに、まるで違う子を見ているような、そんな錯覚を感じる。見間違いなのかと思っても不思議じゃないくらいだ。

その後、しばらく稲森さんの様子を見る。
明るく、雨の日に咲いた花のような笑顔と透き通るような高い声。
それが昨日見た、僕の印象に残っている彼女の残像。でも、今クラスにいる彼女はまるで違う。
無表情で声も少し低くて、友達と話すことはあっても、どちらかというと話を聞いてることの方が多い。
自分から僕に話しかけてきてくれた、あの積極性がまるで見られなかった。
結局、昨日のあの時のような雰囲気を感じ取ることができなかったためか、僕は早々にあきらめていつものようにごく普通の学校生活に戻ることにした。
そして放課後。今日も帰りは雨だった。
昨日と同じように傘を開いて、昇降口を出る。そして、紫陽花が見えた時、そこで足が止まった。
「ねぇ、昨日より花の色が変わってるのわかる?」
紫陽花の花に手を添え、そうつぶやく「稲森梢」がいたからだ。
「色?」
「うん、紫陽花はね、少しずつだけど色が変わっていくの」
そう言われ、僕は花を見る。でも、昨日どんな色をしていたか覚えていないので、まるで判断がつかなかった。
「わからないって顔してるね」
その時思った。上目づかいで、僕の顔を見上げながら問いかけてくる稲森さんの雰囲気は、間違いなく昨日のものだと。
「稲森、さん?」
「ん、何?」
「何だか、教室にいる時と雰囲気が全然違うね」
僕は思っていたことを素直に口に出した。
「ふふ。よく言われるよ」
そう言って身体を起こすと、稲森さんは僕の方へ向き直った。
「飯田光流(いいだみつる)君」
「……どうして、僕の名前を?」
「同じクラスだもん、知らないわけないじゃない」
もっともな意見だと思った。まあ、未だに覚えてない僕が悪いんだけど。
「飯田君、紫陽花は好き?」
「え?」
突然、そんなことを聞かれて、僕は何て答えていいかわからなかった。
「私はね、好きだよ。こうやって、雨に濡れても咲いてる姿を見るのが特に好き」
そう言うと稲森さんは紫陽花に手を伸ばし、花弁の先から滴り落ちようとする水滴を指先で触れ、微笑みを浮かべる。
「じゃあ、またね」
そう言うと、彼女は昨日とまったく同じゆっくりとした歩調で校門の方へ歩いていった。

LILY OF THE VALLEY

Next Flower:
君影草（すずらん）

The flower is also known as Our Lady's tears since, according to Christian legend, the tears Mary shed at the cross turned to Lilies of the Valley. According to another legend, Lilies of the Valley also sprang from the blood of St. George during his battle with the dragon.

嘘吐きが咲き 花は嗤う

音無季常

母が死んだ。
俺の知らない所で、母が死んだ。
幼い頃からずっと一人で育ててくれた母が、死んだ。
母が……死んだんだ。

通夜も終わり、親戚の挨拶回りも一通りすませた俺は、中庭で煙草を吸っていた。
いくら暦の上では春だからと言っても、まだまだ肌寒い季節には変わりない。動きすぎて少しよれたスーツの上着を直し、自分の家の庭を見ながら、生前庭を良く手入れしていた母の事を思い出していた。
不意に、嗅いだ事のある花の匂いがした。
懐かしいとは思うが、どこでかいたかもわからない。
「あの……」
そんな事を考えていると後ろから声を掛けられた。
こちらも懐かしい声……なのだろうか？
よく分からないが、どこかで聞いた事のあるような声だった。
引き寄せられるように振り向く。
「こんばんは、コウさんですよね？　夏樹コウさん……」
俺に声を掛けたのは一人の女の子だった。
歳は学生服のブレザーを着ている所から見るとまだ幼いのだろう、黒く長い髪を眉の部分で切りそろえ、顔色はとにかく白い。目は大きく開かれていて、痩せた脚を包み込むように履いている紺のハイソックスが彼女の黒い髪と白い肌とのコントラストを作っていて妙に艶めかしかった。
まるで人形のような子だったが、くびれた腰や小さく膨らんだ胸を見ると彼女が立派な人間の少女だというある種のイキモノ臭さを感じる。
「は、い？」
あまりにも急な言葉をこんな少女から掛けられたので、俺は吐くはずだった紫煙を間違えて飲んで、少しだけむせた。彼女はそんな俺の背中をさすろうとしたのだろうが、俺は大丈夫だと遠慮した。
伸ばされた彼女の手がしばらく所在なく揺れていたが、やがて静かに降ろして桜色の唇を開く。
「私、夏樹のおばさんに言伝（ことづて）を頼まれていたのですが」
「言伝？」
ふと違和感を感じた。
母は確か、急に逝ったんだと聞いた。俺が駆けつけた時には遅く、発見も随分経ってからだと聞いていたのだ。そんな状況で誰かに物を伝えられるだろうか。
だが、目の前の子はそんな嘘をつく子に見えないし、こんな状況でそんな性質の悪い嘘を言っても、彼女に何の得にもならないだろう。
俺の怪訝な視線に、彼女は恐縮した様子で瞳をそらした。

「落ち着いて話した方が良さそうですね。また後日私の家に来ていただけますか？」
それでは、と一瞥して彼女は去っていく。
去り際、彼女からふわりと、懐かしい花の匂いがしたが、それが何の花の匂いだったかまでは、思い出せなかった。

バス停から一時間、都会的なビル群から抜け出すと、そこは都会とは思えないようなのどかな光景が広がっていた。
四月に入り暖かくなってはいたが、さっきまでのビル群と比べるとずいぶんと空気が柔らかく新鮮なように感じる。
ふと、目に入る白い連なりに俺は驚いた。
「……スズランなんて、最近見てなかったのにな」
都会では決して見る事のない花だ。確かに誰かの家で育てられたり、そこら辺で自生していたりするが、こんな立派で綺麗なスズランはここ最近見た事がない。
うちでも一時期育てていた覚えがあるが、ある日突然母が育てるのをやめてしまった。
もういつの事だったかは忘れてしまったんだが。
「スズランの花言葉知ってますか？」
「うおっ!?　……と」
左肩から白い顔がにゅっと出てきた。
あまりにも脈絡と気配の無さで驚き、思わず数歩後ろに下がってしまった。
そんな俺に対し、彼女は悪戯が成功したのが嬉しいのか、くすくすと静かに笑う。
「ひどいですね、そんなに私の顔は恐いですか？」
「いや、そう言うわけじゃ」
「うん、だって驚かせるつもりでしたからね」
「……君は顔に似合わず悪戯好きなんだな」

「私の名前はユキです」
家に案内される道すがら、彼女は呟いた。
今更な感じはするが、名乗られて、そう言えば彼女の名前をまだ知らない事に気がついた。いつまでも君で話をするわけにもいかない。
俺がいつまで経っても聞いてこない事に気づいたのだろう。年下の女の子に気を遣わせてしまった。
「……良い名前じゃないか」
お詫びの世辞というわけでもない、素直な俺の感想だった。
白い肌と、小さな後ろ姿を見て、白く小さな欠片が曇天から落ちる様を想像した。
彼女のイメージにとても良く似合っていると思う。
しかし、その白雪のイメージは、次の瞬間打ち砕かれた。
「××××　ユキです、××××、です」

MARIGOLD

Next Flower:
マリーゴールド

The common name, "marigold", is derived from "Mary's Gold", and the plant is associated with the Virgin Mary in Christian stories. The marigold was regarded as the flower of the dead in pre-Hispanic Mexico, parallel to the lily in Europe, and is still widely used in the Day of the Dead celebrations.

花と花壇とサラと僕と

えふあな

「カズ、ハンカチは持った？」
「あるよ、ほら」
僕はポケットからハンカチを取り出して、目の前の女の子に広げて見せた。女の子はうん、と満足そうに頷く。ちなみに女の子と言っているので、もちろん母親ではない。そして僕は小学生でもない。
「じゃあいこっか。今日はカズが日直でしょ？」
「そうだけど……行ってきます」
形式的に出発の言葉を告げて、僕たちは外に出る。日差しは晴々としているが、流石に空気は冷たくなり始めていた。十一月にもなると朝の六時台はまだまだ気温が上がりきらない。
「さっきも言ったけど、僕は日直だから早く行くとしてもサラが早く行く必要はないんじゃ……」
「何言ってるの。カズが日直をちゃんとできるか心配なんだよ？」
「そこまで心配されるような仕事はないと思うんだけどなぁ」
ああだこうだと会話を交わしながら通学路を二人で歩く。先ほどから僕のことを心配しているのは隣の家に住む幼なじみだ。サラ、と呼んでいるがけしてハーフなんかではなく、れっきとした日本人で本名は河本更紗という。さらさ、だから昔から僕はサラと呼んでいるだけ。サラの方だって僕のことは和樹、と呼ばずにカズと呼んでいる。ただそれだけのことだ。

「はい、これ」
サラが鞄から丸いアルミホイルを取り出した。なんだろう、と思って受け取るとまだそこには温かさが残っていた。
「……おにぎり？」
「ピンポーン、大正解！」
ぱん、と両手を叩いて大袈裟なアクションを取るサラ。朝からこのハイテンションを維持するのは大変じゃないかと思うが、サラの場合は年中ハイテンションなのが普通なのだ。
「カズ、朝ごはん食べてないでしょ？」
そう言われて初めて腹が鳴った。まるで今のサラの問いに答えるかのように。サラはふふ、と笑っていた。
「カズが早起き苦手なのは昔からだもんね」
「それは、まぁ」
サラがいつも僕より早く起きて迎えに来ているからだとは言えない。小学校の時の修学旅行も楽しみで寝れなかった僕をサラは迎えに来た。
「冷めないうちに食べちゃいなよ」
サラに促されるまま僕はアルミホイルを開く。中には綺麗に握られたおにぎりが三つ。匂いに誘われるまま僕はそれを口に持ってゆく。握り加減、塩加減共に申し分ない。
「やっぱりサラは料理が上手だね」
「褒めてもこれしかないよ？」
「素直な感想なんだけど……」

冗談、とサラは舌をぺろりと出す。昔から一緒だった幼なじみとはいえ、今ぐらいの年齢になると多少は異性として見る時がある。そういった意味ではサラは可愛らしい、と思えた。もちろんこんなこと本人の前では口が裂けても言えない。

「あ、ストップ」

「え？」

不意にサラの指が僕の頬に伸びる。指の腹がかすかに触れ、そして離れた。サラの指の先にはご飯粒、それをサラは自分の口へと運ぶ。艶のある唇から離れる指の動きが、いつものサラとは違うように見えた。

「どしたの、そんな真剣な目で？」

「え、あっ、なんでもないよ」

思わずうろたえてしまう。自分では見えないが、きっと顔を赤くしているのだろう。そうこうしている内に学校に着いた。校門を抜けて昇降口に向かう途中、サラが立ち止まった。

「どうしたの？」

サラの目線の先には花壇に眩しいほどに黄色い花が咲き誇っていた。これは……マリーゴールドだ。少し季節外れな気がしないでもない。

「これってマリーゴールドだよね？」

最初に見つけたサラだったのだが、どうやら名前以外は知らないようだ。説明を欲しがっているようなので、記憶を辿ってマリーゴールドについての情報を脳から引っ張り出す。

「名前はマリーゴールド。菊の仲間で、五月から十月あたりに咲くのが一般的だけど、ここのは少し遅咲きだね」

「流石カズ、よく知ってるねー」

サラは僕を辞書か何かだと思っているのだろうか。そう思いつつも、運良く花言葉を思い出すことができた。

「花言葉って知ってる？」

「それくらいはわかるよ。これの花言葉、知ってるの？」

「うろ覚えだけどね。確か、悪を挫くとか、勇者とか」

「他には？」

「あと、可憐な愛情……他にもあったはずだけど、忘れちゃった」

「……そっか」

言った後にまた少し恥ずかしくなった。サラの方はというと、再びマリーゴールドに目を向けていた。そしておもむろに花壇に向かうとポケットから携帯を取り出し、写真を一枚撮っていた。

「へへ、私、この花好きなんだ」

若干ではあるが、サラが照れているようにも見えた。何故そこで照れるのか僕にはわからない。

「ところで僕は教室に行くけど、サラはどうする？」

「んー、今週はテスト期間前だから朝練は自由だし……」

サラは空手部に籍を置いていた。一見するとまるでそんな風には見えないサラの身体だが、僕はここ数年腕相撲で勝ったた

Toad Lily

Next Flower:

杜鵑草（ほととぎす）

Tricyrtis is a genus of the botanical family Liliaceae, known in English as Toad lilies. They are perennial herbaceous plants that grow naturally at the edge of forests. They prefer shade or part shade and rich, moist soil. Toad Lilies bloom in the fall.

学者アドルフの日々

七曜

ある若い学者が精巧なロボットを作った。
学者の言うことはなんでも聞く従順なロボットを。
メカも人工知能も極めて優秀。
学者に対するプログラムは極めてシンプル。

『私はあなただけのもの』

彼が様々な発見をし、若いうちに富と名声を得たのは、貪欲なまでの知識欲とまた幼い頃からの勉強の習慣のおかげだろう。
ひとたび研究に熱中すれば寝ることを忘れ、ひとたび論文を書き始めれば仕上がるまで食べることを忘れる。
ある意味病的ともいえる集中力は短期間での膨大な研究に役立ち、またそれによって賞賛と財産が得られるのは当然の結果といえた。
——しかし。
「アイン」
「はい、アドルフ様」
「紅茶を頼む」
「かしこまりました」
彼には支えてくれるヒトがいなかった。
両親も、かつてのクラスメイトたちも、彼を不気味と思っていた。
人間は社会的動物だというのに人間にまったくの関心を寄せない彼は異端視されていたのだ。
人間に関心を寄せるときもあるのだが。
もっとも、その場合の人間というのは人ではなくヒトを対象にしているのだが。
傍観者が彼を褒め賞賛しても、一番彼に近い人間は関わろうとしない。
なんという皮肉だろう、と彼の心は考える。
こうして研究が一段落したときにも彼をねぎらう人間は屋敷内にはいない。
——そんなもの必要ない。
そのためにこのロボットがいるのだから。
感情に動かされ簡単に人を拒絶することもない。
研究中もずっと傍にいてくれる。
そしていかなる指示にも従う従順さ。
人間にこれだけを求めることができるだろうか？
おそらくどれ一つをとっても不可能だろう。
それを簡単にこの機械はこなすのだ。
「紅茶が出来上がりました」
「ありがとう」
機械にお礼を言ってティーカップを受け取る。
そして一口すすってから彼はふと思い直す。
——機械なのだから当然だ。
そのように作ってあるのだから、と。

「どうかなさいましたか、アドルフ様？」
「いや」
そしてもう一口。
「……今日も美味いと思っただけだよ」
「ありがとうございます」
表情のないロボットは生命のない体でお礼の言葉を発した。
こうして矛盾だらけの彼の日々は過ぎてゆく――。

◆　◆　◆

「アイン」
「はい、アドルフ様」
「紅茶を頼む」
「かしこまりました」
人形のような姿が部屋を出て行くのを見送って彼はタバコをくわえ、火をつけた。
ふうーっとゆっくりと煙を吐き出す。
九月の雨が多く鬱陶しい季節。
窓の外ではやはり雨が黒い景色を滲ませていた。
――こういう日は何もする気が起きない。
以前に読んだフランケンシュタインの小説を思い出すからだ。
死肉をつなぎ合わせた怪物は雷の鳴る雨の日に生を受けた。
フランケンシュタインほど愚かな思考は持ち合わせてはいないつもりだが、それでもどうしてか自分の研究がそれとダブっていまひとつ憂鬱な気分なまま集中力が続かないのだ。
「お持ちいたしました」
ノックの音がし、ティーポットと紅茶と砂糖が乗った盆を乗せたロボットが入室してきた。
しかし、と盆を用意したテーブルに機械仕掛けの人形が置くしぐさを観察しながら彼は考える。
もしこのロボットが命あるものだとしたら、自分は成功者なのだと。
「お砂糖はお入れしますか？」
「いや、いい」
席を立ち上がってテーブルに着く。
「ん？香りがいつもと違うな」
紅茶を飲もうとカップを口に近づけたとき、彼は少し訝しんだ。
いつもは気をつければわからないほどの微量な柑橘系の香りが紅茶からするのだ。
つまり、彼が何も言わずともロボットが自分で考えてオレンジなりレモンなりの果汁を少量混ぜているのだ。
どういう意図かはわからない。
が。まあ、自分に危害を加えるようにはプログラムしていないから安全だろうと安心してそれを飲むわけだが。
とにかく、今日の紅茶はいつもとは違い、どこか落ち着く香

MADONNA LILY

Next Flower:
百合

The genus Lilium are herbaceous flowering plants normally growing from bulbs. They comprise a genus of about 110 species in the lily family, Liliaceae. They are important as large showy flowering garden plants. They are important culturally and in literature in much of the world.

手にした百合は永遠に

mitori

――七月一日――

今日からマリーベル・エメルは、日記をつけます。
ねぇ、なんでこんなことしないといけないのかしら？
私だけの特別な宿題なのだそう。
私だけこんな小さい子のような宿題を余分にもらって、すごく損した気分だわ。

でも、アルマ先生がなるべく、毎日つけなさいと言うのだから、仕方がないこと。
先生の出した宿題を忘れると、またあのぴしぴしと音の鳴る黒い棒で、手のひらを打たれてしまうのだから。
あれはとても痛いの。
だから私は日記をつけることにします。
これを読む人はアルマ先生？
全部、うそをつかないで書くのが約束でしょう。
なんでもかんでも、私のこと全部書いてしまうのだから、アルマ先生以外には読んで欲しくありません。
そういう約束はしてもらえるのかしら。
お願いします。アルマ先生。

それじゃあ、さっそく今日のことから書きます。
今日は、不思議なことが起きました。
白い花のつぼみが部屋にいつの間にか置いてあったの。
誰が置いていったのかしら。メイドの誰か？
わからないけど、このまま置いておけば、綺麗（きれい）な花が咲きそうだから窓に飾っておくことにするわ。

あとは何かしら。
私は病気で寝てばっかりだからあまり書くことが無いわ。
今日も本を読んでました。それくらい。あぁ退屈。
庭師のマリオンはいつも外を駆け回っていて羨（うらや）ましいわ。

――七月二日――

今日は隣町からロベルトがきたわ。
彼はお父さまのお友達、カレスおじさまの息子さん。
でも私よりずっと年上で、背も高くって大人な感じ。
あんまり私とお話してくれないけど、時々、ここよりもっと大きな隣町のことを教えてくれるの。
やっぱり、都会の人はおしゃれでかっこいいわ。
すごくうらやましいな。私も行ってみたいのに。
あ、それでね。
ロベルトは今日から何日か私のお屋敷で、過ごすみたい。
嬉しい。色々なことをお話できたらいいな。

――七月三日――

あぁ、残念。
ロベルトは今日一日、お父さまと一緒に、乗馬へ出て行ってしまって会えなかったの。
お父さまの意地悪。
私だってロベルトとお話がしたかったのに。
会えないってわかると、ますます会いたくなってしまう。
どうしてかしら。
お夕飯には戻ってきたから、そこで一緒に食べることはできたけど、私はおしとやかに。って言われているから何も話せないの。
ロベルトもお父さまとのお話ばっかり。
二人はとても楽しそうで私のほうなんて見てくれないわ。
なんだかちょっと悲しい。
でもそのときのロベルトはいつもよりちょっとお喋りで、少し楽しそう。いいな……

――七月四日――

今日は良い日。
ロベルトが一日中私とお話してくれたわ。
やっぱり隣町のお話が一番楽しい。
今、あっちではカードゲームが流行っているのだって。
私にも今度持ってきて遊び方を教えてくれるって。
すごく楽しみ！
そうそう、ロベルトは何でも知っているの。
窓辺に飾っていたあの白い花、ユリっていうのだそうよ。
このあたりには咲かない珍しい花だって教えてくれたわ。
彼もこの花が好きだって。お揃いでちょっと嬉しい。
やっぱりロベルトはいろんなことを知っていてすごいの。
私も都会にいければいろんなことをしてみたいのに……

――七月五日――

今日もロベルトとお話ができたの。
ロベルトはお医者さまになる勉強もしているのだって。
そんなことまで考えているなんて、やっぱりすごい。
お父さまもロベルトのことを誉めていたわ。
なんだか自分が誉められている気分になってしまうの。
そのあとちょっとだけ私の容態も見てくれたわ。
いつも来る、アレン先生みたいに聴診器を使ってね。
ロベルトはちょっとだけ難しい顔をして、私のこと、かわいそうだって。

JAPANESE CHERRY

Next Flower:

山桜（やまざくら）

It is widely grown as an ornamental tree, both in its native area and elsewhere throughout the temperate regions of the world. Numerous cultivars have been selected, many of them with double flowers with the stamens replaced by additional petals.

桜下紅恋

いずみやみその

…なあ
本当に
いいわけ？
はい…

ここじゃなきゃ
いやなんです

…。

まあ誘って
くれてるんだし
悪い気は
しないか
ぐいっ
あ――

桜下紅恋
いずみやみその
——あ…
んっ

MEXICAN ASTER

Next Flower:
秋桜（こすもす）

Cosmos bipinnatus, commonly called the Cosmos or the "Mexican Aster", is a medium sized flowering herbaceous plant sometimes grown in gardens. This species is considered a half-hardy annual, although plants may re-appear via self-sowing for several years.

Falling Fall

t- Я

「ふわぁぁぁぁぁん……、やだぁ！　おうちかえらない！　しようごくんともっとあそぶのーっ！」
「……こぉら、いい加減にしなさい、織乃。そんな我儘言ってたら昌悟くんだって困っちゃうでしょ。ほら、早くバイバイしなさい」
「やだぁー……！　バイバイやだぁ!!」
夕暮れに沈み行く小さな公園。
幼稚園に通い始めたばかり、といったくらいの幼い女の子はその小さな体で精いっぱいの癇癪を起こして、困り顔の母親を更に困らせる。
公園の砂場には男の子が一人。泣き叫ぶ女の子とその母親をただ見比べては可愛らしい瞳をくりくりと泳がせていた。
夕飯の時間が近くなり帰宅を促す母親と、もっと男の子と遊んでいたいとそれを拒否し続ける女の子。そんなありふれた日常のとある光景。
今生の別れでなくとも女の子には、この一時の別れでさえ我慢しきれない程であったのだった。
「しのちゃん、おかあさんをこまらせちゃダメだよ。きょうはもうおうちにかえらなきゃ」
「やだっ！　しょうごくんまでなんでそんなこというの!?　もっとたくさんたくさーんあそぼうよっ！」
男の子の声にさえ反発し、頑として公園を出ようとしない女の子。
この女の子がこうして時間になっても家に帰ろうとしないのは、何も今日が初めての事ではなかった。
場所が何処であれ、その男の子と遊んでいる時だけは決して母親の声を聞こうとはしないのだ。
とはいえ女の子もまだまだ幼い子供であり、さすがに実の母親に強く一喝されれば萎縮してしまう。
そうして今までは女の子も渋々ではあったが母親の言う事を聞き、遊びを途中で切り出して帰宅していた。
しかし、今日に至ってだけは女の子も胸中に宿る想いを譲らない。それまで抑制されていた気持ちが溢れ出てしまったのだろう。再三の母親の呼び掛けにも、男の子の帰宅を促す言葉にも耳を傾けようとはしなかった。それ程に、女の子はその男の子と一緒に遊んでいたかった。もっとずっと一緒にいたかったのだ。
簡潔に述べるなら、女の子はその男の子のことを好きで好きでたまらなかったのだった。
「それじゃあやくそくしようよ」
「……やくそく？」
だからだろうか。
ふと、風に乗せられて優しい声色で紡がれた男の子のその言葉が、それから何年経とうとも女の子の頭から離れることはなく――――
「おおきくなったらぼくたち、ケッコンしよう。それならずっ

といっしょだよ」
「ずっと……ずーっと？」
「うん、ずっといっしょ。だからきょうはおうちにかえらなきゃ。おかあさんをこまらせるようなこはケッコンできないんだよ」
「や、やだっ！　しょうごくんとケッコンする‼　おかあさんをこまらせるようなことしない！」
「じゃあぼくとやくそくだ。しのちゃんがこれからおかあさんをこまらせずにおとなになれたらぼくたちはケッコンする。やくそくだよ」
「うん、やくそく！」
そうして静かに繋がれる二人の小指と小指。
二人の可愛らしいやりとりに笑顔を浮かべる女の子の母親。
『少女』は今もこの約束をしっかりと覚えていた。

◆　◆　◆

朝に強い体質だったことにしみじみ感謝しながら、今日もいつもと同じ時間にいつもと同じ支度を済ませる。
平日の朝六時半。開いた窓からそよぐ風。部屋が二階だからか、私を撫でつけていく風がとても気持ちよくてつられてついつい伸びをして。
「えーっと課題おっけー。お弁当もおっけー。あとも大丈夫よね。それじゃあ、あいつを起こしにいきますか、と」
部屋を出て階段を降りて、いつものようにお母さんに「いってきます」の挨拶をして、いつも着慣れた制服に身を包んで、私——片瀬織乃（かたせしの）はいつものように幼なじみの家へと向かっていった。

◆　◆　◆

朝早くの為、私達以外に誰もいない住宅街。閑散としつつ清々しさもある秋の朝。
そして、そんな素敵な爽秋の空気を台無しにする幼なじみの呻き声。
「……ってぇ～。……あのさぁ、前にも言ったけどもうちょっと優しく起こそうって気はないの？　寝てる人間のレバー狙うとかむしろお前すごいよ。容赦なさすぎてむしろ天才」
まだ眠そうな顔をして、今朝起きたばかりの『事故』の凄惨さを語る彼。そう、あれは事故なのであって絶対に私の過失ではない。
「わかってるよ。だからそれは悪かったって言ってるじゃない。いつまでもグチグチ言ってないでよね。それに最初は優しく起こそうとしたんだよ？　でも昌悟（しょうご）ったらぜんっぜん起きない

EDELWEISS

Next Flower:
薄雪草（うすゆきそう）

Edelweiss, one of the best-known European mountain flowers, its name comes from German edel (meaning noble) and weis (meaning white). The scientific name, Leontopodium means "lion's paw", being derived from Greek words leon (lion) and podion.

あの根（ね）の値（ね）

漫遊

綺麗（きれい）な花には何とやら、と申しますな。綺麗だから毒やトゲがあるのではなく、むしろがそういった部分があるからこそ、その美しさが際立つのかも知れません。
「おい、アツシの奴、女に騙（だま）されて逃げられたショックで自殺しちゃったんだってよ！」
「本当かオイ！　ひどい話だなあ。まああいつには不釣り合いな美人だったし、どこかトゲがある感じだったしな。かわいそうに。ところでヒデキ、おまえはどうなんだよ。最近彼女が出来たらしいじゃないか、その子はそういう怖い子じゃないだろうな。間違っても自殺なんかするなよ？」
「大丈夫だよ。こいつの彼女、顔が不味いからこいつは長生きできる」
って、うれしくも何ともありませんが。

◆　◆　◆

東北地方のとある山、東京の大学のゼミ生たちが夏合宿で登山にやって来ております。そのうちのほとんどがせっせと山を登っている中、ゼミの中でも落ちこぼれと評判の川間大地と光野あげは、友達以上恋人未満の二人が他の学生からだいぶ引き離されたところで何やらぶつぶつとやっております。
「ぜぇ、ぜぇ、はぁ……。まったくうちの教授は何考えてんだろうな、ゼミの合宿で山登りなんてするか普通？　これだから年寄りの考える事は……。そう思うだろあげは？」
「まあまあ、これも貴重な学生時代の思い出って事でいいじゃない。大地は山嫌いなの？」
「いや、嫌いって事はないが、限度ってもんがあるだろ。高尾山とか筑波山とか、せいぜいその辺だよちょうどいいのは。何が悲しくて登山部でもないのに標高千五百メートル級の高山に登らにゃならんのだ。あー、俺はもう嫌だ！　あげは、悪いけど俺はここで休んでるからみんなには『川間大地は持病の癪が出たので下で休んでます。みなさん僕の分まで頑張って下さい』って伝えといてくれ」
「ダメよ、何言ってるのよ！　あんたのサボり癖はゼミでも有名なんだから、私は教授から『あー、光野君、君ね、川間君が途中で逃げ出さないようにちゃんと連れてきてくれたまえ。そうしないと君も単位あげないよ』って言われてるんだから！　引きずってでも連れてくからね！」
「えー、面倒臭ぇなぁ……。あ、そうだあげは、どうしても俺に登ってほしいならいい考えがあるんだが」
「何？」
「俺の尻を後ろから押してくれないか？　そうすりゃ楽に登れる」
「年頃の乙女になんて事言うのこのバカ！　滑落して死ね！」
「ちょ！　おま！　蹴るな！　分かった分かった！　登りゃい

いんだろ登りゃ！　冗談じゃねぇぞ本当に……」
　なんてんで、二人でなんやかんや言いながらやっとの事で六合目にある山小屋のところまで辿り着きます。
「おー、川間君に光野君、やっと来たかね、遅いよ。特に川間君、君は登る前にみんなの前で『はん、この程度の山なんて朝飯前ですよ』なんて大口叩いてた割には随分時間が掛かったじゃないか。やっぱり普段の運動不足が祟ったのではないのかね？　どこが朝飯前なんだね」
「はい、仰るとおりで。昼飯後でした」
「何を馬鹿な事を。それより見たまえこの渓谷美を！　日常の雑事が本当にちっぽけなものに思えるだろう」
「そうですね。そういう訳で試験なんてちっぽけな事はしないで無条件で単位下さい」
「またそうやって君は……。よし、それならこうしようじゃないか。私が今からあの渓流にこの東京オリンピック記念メダルを投げ込むから、君それを取って来てみたまえ。そうしたら無条件で卒業単位をやろう」
「ちょっと何言ってるんですか教授！　本気にしますよ？」
「本気にしたまえよ。私は本気で言ってるんだから。それ！」
「わ、ホントに投げ込んだよこの人！　分かりましたよ。それじゃあやってやろうじゃないですか。しかしずいぶん深い渓谷だなぁ。どうやって降りようか……。すいません山小屋のおじさん、この渓谷深さどのくらいですか？　え？　百メートル？
　落ちたら死ぬなそれは。でもあれだ、あそこに何かの観測用の設備がありますよね？　ああいうのがあるって事はどこからかこの渓谷に降りられるんでしょ？　どのくらい回り道すれば降りられる場所がありますか？　え？　十六キロ？　遠いよ。しょうがないなぁ。そしたらもう……あ、そこに傘があるぞ傘が。これをパラシュート代わりにして降りられないかな？　よしやってみよう。おじさん傘貸して下さい傘！」
「ちょっと大地！　何馬鹿な事言ってるのよ！　そんな事出来る訳ないでしょ！」
「出来る訳ないでしょって、やってみなけりゃ分からないだろ？　うまく行けば一発で卒業確定だぞ？　ふっふっふ、見てろよー。傘を開いて、せーの、いち、にの、さ……ダメだなー。やっぱり腰が引けるよー。いち、にの、さ……。うーん。どうもなあ。目をつぶろうか。いち、にの、さ！　ダメだー！　うーん、どうしたもんかなぁ……踏ん切りがつかないなぁ」
「おい光野君、あそこで川間君が踏ん切りが付かないって悩んでるから、ちょっと君、仲良しのよしみで背中を押してあげたまえ」
「ちょ！　何言ってるんですか教授！　そんな事したら落ちちゃうじゃないですか！」
「でも彼は単位欲しさに自分から飛び込もうとしてるんだから、その意気やよし、ここはひとつ協力してあげるのが人情というもんだろう」

CAMELLIA

Next Flower:
椿（つばき）

Elizabeth, the Queen Mother grew Camellia in all of her gardens. As her body was taken from Royal Lodge, Windsor to lie in state at Westminster Hall of the Palace of Westminster, a Camellia from her gardens was placed on top of the flag-draped coffin.

侵蝕

辛枝

1

かさり。

ぼとり。

幽(かす)かではあるけれど、それだけに耳にのこる、不規則にかわいた音でわたしは目を覚ました。

ああ、庭先の椿の花が落ちているのだな、と思った。

まるくほころんだ椿の花が——雄蕊(おしべ)や雌蕊(めしべ)や花弁をともなって咲き誇る花そのものが、ある瞬間を迎えて何の未練もなく落ちる姿は、この上なく美しい。

かさり。

ぼとり。

あれから幾日が経ったのだろう。

もう何年もこうしているようだ。

ちいさな木枠の窓からヴェールのように白い光が注ぎ、微細な埃(ほこり)がそれをうけてきらめいている。

藁のささくれた暗い土壁。

その壁に散らばる黒い染み。

それが、わたしに見える世界のすべて——。

しかし、わたしの脳裡(のうり)には、椿の花首がつめたい雪の上であざやかにほほえむさまが、はっきりと映し出されていた。

——花のいのちは、枝から切り離されれば終わってしまうものなのだろうか。ならば何故、あの花はほほえんでいられるのだろう。

そして何故——。

あの女(ひと)は泣いているのだろう。

わたしはあなたを憎むべきなのでしょうか。

いっそ憎めば、あなたは救われるのですか。

そばにいると、約束したではありませんか。

わたしは何処へも行きません。

それでもあなたが泣くのなら。

あなたが泣きやむまで、せめて——このままで。

2

山下惣介がひとつ年上の友人の家を出たのは、午後十時をちょうど過ぎたころであった。

新宿からほど近いはずの中野あたりでも、この時分はすでにどの家も灯りを消して寝静まっているようである。

しとしとと外套を湿らせる霧雨が前日から残る雪にまざり、刺すようなつめたさが靴の先に染み込んでいた。

この世に生きて、動いているのは自分だけではないかという錯覚を起こさせるほど、街路灯の光が届かない闇はどこまで行っても闇で、惣介が道を急ぐばしゃばしゃという足音のほかはなにも聞こえないのであった。

しかしながら惣介は「怖い」という感情が極端に希薄な青年であった。

狐狸妖怪、はたまた幽霊の類は端からお伽話の世界のものだと信じていたし、細い黒ぶちの眼鏡をかけたいかにも文学青年という華奢な見かけによらず、幼いころから通っている柔道場ではひとまわり体格の違う巨漢を捻じ伏せてしまうほどの剛力の持ち主でもあった。

（こんなところで大ぜいに囲まれて、車に押し込められたらわからないな）

しかしそんな懸念には及ばないことを惣介は承知していた。あたりには人影も車の気配も感じられず、ただ濡れた道がどこまでも続いているだけであった。

乗合でもあれば、駅まで乗っていこうかとも思ったが、しかしこんなにも静かな何もないような道では、それも難しいようだった。

（酒でも入れていればすこしは帰りが暖かいだろうか）

惣介はどうかすると迷ってしまいそうなほど単調に続く家々の黒い塀を追い越しながら、来週またおなじ友人の家を訪れるときの手土産は饅頭以外のものにしようと考えていた。

二十五も過ぎた男ふたりが、饅頭を片手にプロレタリア文学について議論を交わすのもじつに滑稽な姿である。惣介はその光景を想像して少し愉快な心持になった。

先の大震災からそのままになっているのだろう、大きな割れ目の入った崩れかけた土塀の家を越え、ひとつめの角を右に折れると、あとは道なりに、惣介の足ならば四半刻ほども行けば駅にたどりつくはずであった。

しかし、その曲がった先で、この暗くさむい夜道には不似合いな、意外なものが惣介の目に飛び込んできた。

紅色の花が描かれた、あれは——着物？

ということは、人間なのか。

少しはなれた街路灯の真下で、何者かがうずくまっているようなのである。

ふつうであれば、ぎょっとするだけではなく、この得体の知

DOGWOOD

Next Flower:
ハナミズキ

This species has in the past been used in the production of inks, scarlet dyes, and as a quinine substitute. The hard, dense wood has been used for products such as golf club heads, mallets, wooden rake teeth, tool handles, jeweler's boxes and butcher's blocks.

God bless flowers... and You?

葉月倫

「これ、この前のお礼なの。もらってくれるかな？」
そう言って俺の前に差し出されたのは、細めの枝ぶりにやや大きめの薄いピンクの花をつけた、一本の鉢植えだった。
そうか、そう言えばもうそんな季節だったな。
目の前の、ちょっと上目遣いに俺を見る女の子――みずきと同じ名前を持つ花、ハナミズキの鉢植えだ。
「ああ、ありがとう。お袋もきっとまた喜ぶよ」
少し重そうにその鉢植えを抱えていたみずきからそれを受け取って、俺はそこに咲く、俺にとっては既に見慣れた存在であるその花をあらためて眺めてみた。
この時期――学年が変わり、クラス替えだのなんだので起こる毎年のバタバタもようやく一段落して、目前に控えた大型連休に心が浮かれだす頃。
みずきは、今くらいになるとほぼ毎年のようにこの花を俺に贈ってくれる。
幸い我が家にはそれなりの広さの庭があって、木やら花やらを植えて育てることについては不自由しなかった。両親共に庭いじりが唯一の趣味と言っていいような家でもあり、みずきもそれをわかっていて持ってきてくれるのだろう。
ただ俺自身にはそっち方面の興味がまるでないので、喜ぶのはもっぱらお袋ではあったけれど。
「お姉ちゃんも喜んでたよ。もう一ヶ月くらい経つのに、一日一回はお花見のことを話さないと気がすまないみたい」
やれやれだよ、と苦笑を浮かべるみずき。
今年、この花を贈ってくれた理由。それは『このあいだは、お姉ちゃんをお花見に連れていってくれてありがとう』だった。
あれはちょうど一ヶ月くらい前だったか。
春休みの一日、今年一番の見頃だという日を狙って、俺はみずきの姉のさくらと二人で花見に行った。
「きっとたくさん食べるだろうと思って」
いったい中の弁当箱は何重になってるんだろう、と考えるとちょっと怖くなるくらい大きな風呂敷包みを嬉しそうに抱えたさくら。
その姿に思わず笑ってしまいながら、俺は彼女を車椅子に乗せて、道中汗だくになりながらもこの町一番の桜の名所と言われる公園まで押していった。
さくらは、自分の足で歩くことができない。
まだ彼女が幼かった頃、木の上に咲く花を取ろうとして枝から落ちた同い年の子供を、小さな体で何とかかばって受け止めようとして。
二人分の体重がもろにかかったさくらの両足は、骨、神経、腱が再生出来ないほどに壊れ、それからずっとさくらは車椅子の生活を送っている。
それは、無理して出来もしないことをやろうとして、失敗して落ちた間抜けなガキ――俺の責任だった。

「ほら、あの木に咲いてる花、きれいだろ？」
「わ～！　うん、とってもきれい～！」
思えば小さい頃から、さくらは本当に花が好きだった。中でも特に木に咲く花が好きだったのは、やっぱり自分と同じ名前の花――桜のせいなんだろう。
四月も終わりになって、比較的遅咲きだった桜の木にかろうじて残っていた花も全て散ってしまい、さくらは毎日をどことなく寂しそうにしながらすごしていた。
何とかさくらを元気づけてやりたかった俺は、近所の林の中でとても鮮やかなピンク色の花を咲かせた木を見つけて、これならきっと喜んでくれるんじゃないか、と期待してさくらをそこに連れていった。
俺とさくらは生まれた頃から既に家族ぐるみの付き合いがあって、俺は物心ついたころから両親に『あなたは男の子なんだから、さくらちゃんを守ってあげなきゃだめよ』と何度も言われていた。
だからさくらが悲しそうにしているのを見て、何かしてやらなきゃいけないんだ、という気持ちでいっぱいになっていた。
「すごくきれい……もうちょっと背が伸びたら、もっとそばで見れるのに」
少し残念そうな顔をするさくらを見て、きっともっと喜ばせてやりたい、とその時は思ったんだろう。
俺はつい、さくらに言ってしまった。
「それなら、ちゃんと見えるように取ってきてあげるよ！」
正直、さくらにカッコいいところの一つも見せたかったんだろうと思う。
「え？　でも危ないよ……」
とさくらは止めてくれたが、俺は
「平気平気、ボクさ、木登りは大得意なんだよ」
と強がって、任せとけ、とばかりに木に飛びついた。
実際、自信が無いわけでもなかった。家の庭で遊んでいる時に、よく木に登っては親に怒られて、それでも懲りずに別のもっと高い木に登って……なんてことをずっと繰り返していた。だからこれくらい何でもない、とその時は思ったんだろう。
実際上を目指して登っている間は怖くもなんとも無かった。家のきっちり剪定された木ではなく自然のままに育ったそれは、元々少し斜めの方向に伸びていて登りやすかったし、手足を引っ掛ける枝やうろなんかもたくさんあって、俺はそれらを使って上へ上へと気分良く登っていった。
そして一本の枝の先に、特に鮮やかなピンク色をした大きな花を見つけて、あれが良いかな、と枝に飛び移った。
そこで俺は、初めて下を見てしまった。
多分高さにして四～五メートルくらいだったと思う。大人から見ればもの凄く高いという程ではないが、まだ小さかった俺にとっては、下にいるさくらの背丈の何倍もある場所で不安定な枝一つにしがみついているという状態は、心に恐怖を抱かせ

BLUE ROSE

Next Flower:
青薔薇（ばら）

Blue roses traditionally signify mystery or attaining the impossible. They are believed to be able to grant the owner youth or grant wishes. This symbolism derives from the rose's meaning in the language of flowers common in Victorian times.

the Blue Planets

有栖山葡萄

この花が咲くとき
あなたはどんな
奇跡を見るのだろう

序．星と花

『当機はまもなく第二東京国際空港に到着いたします。現地の時刻は午後二時、天候は晴れ、地上気温は摂氏二十度、酸素濃度は二十四パーセントとの報告を受けております。Ladies'n Gentlemen, we're soon arriving to……』

聞こえてきた機内アナウンスに、ラウンジ窓際の席に座っていた彼女は立ち上がり、小さく「んっ」と伸びをした。そしてティーカップをカウンターに戻すのと代わりに、スタッフに声をかけ水のボトルを一本もらいキャビンに移動する。

予想以上に快適だったフライトと、先ほど窓から見下ろしていた光景に、彼女の気持ちはこれ以上なく昂ぶっていた。

他の乗客達も同じように席に戻りはじめ、キャビンはにわかにざわめいている。耳を傾けると、やはりその声はこれからの旅への期待に踊っていた。

彼女が席につくと、隣に座る男性が寝ぼけ眼でぼんやりと視線を向けてきた。周囲のざわめきにようやく目を覚ましたようだった。

「おはよう」

「あぁ、おはよう。なんか騒がしいな」

彼は掛けられていた毛布をもぞもぞとはぐと、肘掛けのパネルを操作して背もたれを起こした。

「えぇ、もうすぐ着陸だから」
「あぁなるほど、もうそんな時間なのか。とりあえず喉が渇いたから、なんか飲んでくるとするよ」
「ベルトサインが出て、もうラウンジは閉まってるわよ。かわりに、はい」
彼女は立ち上がろうとする彼を止めて、先ほどもらってきたボトルを手渡す。
「ありがとう、さすがだね」
「どういたしまして」
微笑みかける彼女に、彼も笑顔で返しボトルを受け取ると、封を切って水で喉を潤した。
「ふぅ、一息ついた。飲むかい？」
「私は大丈夫、さっきお茶を飲んできたから」
「そうか、じゃあ全部もらうよ」
彼はもう一度水を口にふくみ喉をしめらせると、彼女に話しかけた。
「すごく嬉しそうだな」
「やっぱり判る？」
楽しげな彼女につられて、彼の頬がゆるむ。
「そりゃそんな笑顔見せられたら、嬉しくないって思う方が難しいぞ？」
彼女のまさに顔に書いてあるといえる上機嫌な笑顔に、彼も頑張った甲斐があったと嬉しくなった。

「新婚旅行でここに来ようなんて、初めていわれたときは正直びっくりしたよ」
「そうかな？　普通にアベックの旅行に人気はあるよ」
彼は出発前に聞かされた話を思いだした。
これから降り立つその場所が創られた物語を、そしてその裏にある本当の物語を思いだす。
「そういえばあの話って、碧枝（たまえ）のご先祖様に当たるんだよね」
彼が問いかけると彼女は目の前のスクリーンを見つめたまま「そう」と答える。
「私の曾お祖母ちゃんの妹、ずっと遠いご先祖様よね」
彼女がじっと見つめるスクリーンには、徐々に近づいてくる空港周辺の映像が映し出されていた。そして一組の夫婦が創り出した愛と奇跡の物語が字幕で流れ、これからの旅の始まりを演出している。
「これは作られた表のストーリー、でも本当は」
彼女が呟く。
「この間聴かせてくれた……」
彼も小さく呟き答える。
「そう、私と同じ碧い瞳を持つ女性の本当の物語」
そして彼女が語ってくれた、奇跡に隠された本当の物語が彼の脳裏によみがえった。